

はり限られた人数で⁽¹²¹⁾子どもたちの安全・安心を守っていく責任の部分であるとかも体感していただくことによって、終わってから「夜勤で、こういうことを感じた」という発言をされる学生も多いかなというふうに思います。

乳児院のほうで、私どもの施設のほうでは、必ず⁽¹²²⁾新生児から1歳までのベビーの部屋に実習に入っていたり、10日間の決められた期間の中で、⁽¹²³⁾そもそも実習生を受け入れるときは、⁽¹²⁴⁾他校の方であるとか他校のグループが重ならないように受け入れているので、1期間に必ず2名まで、小規模ユニニケアをしていますので、ホーム編成として6ホームあるんですけども、その実習に入っていただけで部屋も重ならないようにしています。なので、⁽¹²⁵⁾1部屋に1人の実習生というところで、丁寧な指導ができるようにというのは心掛けていますし、⁽¹²⁶⁾反省会というのも毎日、設けるようにしています。

あと、⁽¹²⁷⁾実習担当者として2名、乳児院のほうでは配置されているんですけども、日々の指導というのは、⁽¹²⁸⁾その部屋の職員一人一人に担当しているってのもあります。⁽¹²⁹⁾毎日、交代勤務の中で担当を割り振っていますので、⁽¹³⁰⁾さまざまな職員からいるんじゃないかなというところでは、一つ、大切なことかなというふうに思っています。乳児院でしかできない実習というところで、乳児院を含めた社会的養護の施設というところでも、やっぱり⁽¹³¹⁾利用者、子どもたち一人一人を理解して、⁽¹³²⁾なぜこういう行動を子どもたちが取ったのか、⁽¹³³⁾この行動に対して実習生自身はどういうことをお考えになるかというところも実習生から教えていたいただきたいと思いが、経験を積んでいただけられるようにしています。が、⁽¹³⁴⁾赤ちゃんと関わりのというのは、実習生自身、すごく悩まれる方も多いですので、その部分で、⁽¹³⁵⁾どういった指導が効果的なのかというふうなことは悩むこともありま

す。

養②： なかなか⁽¹³⁶⁾生の1次情報に触れるという機会は、県内では、保育実習では提供しないと。「触れていただくことはできません」と言われる施設もあるんです。ただ、やっぱり子どもたちの置かれている現状というようなことを、1次情報に触れる機会が経験できたら、それはとてもありがたいというのを今、伺っていて感じたところです。

それと、⁽¹³⁷⁾権利擁護のことについて言いますと、なかなか施設間でも、ちよつと。以前、どのようなことを学生に学んでほしいかというような、現場にアンケートで調査をさせていただいたことがありまして、そのときに、権利擁護についてはしつかり学ばせたいことだということ、養成校の教員も施設の職員方も思ってくださいたいんですけども、これが、なかなか、⁽¹³⁸⁾助言という形で伝えることはできないけれども、体験したり体感したりというところで、⁽¹³⁹⁾どのようにしたらいいかということ、⁽¹⁴⁰⁾難しいと言われているところも分かったということ、ちよつと今、お話を伺いながら思

まだこのことを教えていなかったよね」とか、「このことを伝えていなかったよ」とか、学生もそれを見ながら、「ああ、まだこれは、この件については聞いていないです」とか、「この点をもっと詳しく聞かせてください」とか、紙に書かれていますので、簡条書きになっているので、それを見ながら、⁽¹⁴¹⁾お互いに学生の到達度というのを確認しながら取り組めるので、担当者が複数いますので、1対1ではなくて、実習担当とは別で、ホームの担当者が中心になつていきますので、そのホーム担当者がその学生を理解する上でも、すぐくづラスにはなっている。

問題は、学生によっては、そのカリキュラム、例えば、傾聴とか、⁽¹⁴²⁾基本的なことでも理解していない学生が来たときに、せつかく作ったカリキュラムの意味があまりなくなるといふことはたまたまに、そのレベルじゃない学生がい

らっしゃって、「ああ、ここまで来ていないか」という。

施①： 実習担当は、その部署、うちは児童の15人ずつの棟が2つあって、そのトップがいる。それが実習の担当で、その下に課長がいて、それが実際の現場のとこでやる。

これを覚えてほしいということというのは、カリキュラムみたいなものを作っていない。最初にそちらからの課題と、こちらとしては、これぐらいをやってほしいという話はする。その後は、その実習生に付く⁽¹⁴³⁾実習担当の職員と一緒に仕事をしてもらう。

経験してほしいのは、特に今、知的障害児施設、障害児施設は、大きく分けて3つぐらい。本場に昔ながらの⁽¹⁴⁴⁾「障害の程度が重くて」というのと、ひとり親と、⁽¹⁴⁵⁾あとは虐待です。そういう子どもたちが⁽¹⁴⁶⁾どうしてこういう所で生活しなきゃいけないのか、そこで生活しているということを見て、一緒に経験してほしい。

そこで、「ああ、この仕事もいいな」と思ってくれた方は、それなりに自分で課題も見えてくるでしょうし、その後、自分がどういう仕事に就こうかなと思つたときに、うちもその選択肢の一つにしてもらえる。ただ、「本当は来たくなかった」というのが見える人もいる。それでも来て、十何日、うちで実習するのは、最初、嫌々だったかもしれないけれども、どこか、いいところというのが、「こういうこともあるんだな」ということを知ってもらえればいい。短大生だと、本場に20歳ですよね。自分が20歳のことを思つたら、そこま

でと実は思う。20歳でうちの仕事に就く人は、そういう人。去年、福祉系の高校を出てすぐ来てくれたと今も今伸びている方。

世の中、福祉というのはいろいろある。特に障害者福祉はマイノリティーなので、そこに実習に来てくれて、そこで⁽¹⁴⁷⁾「こういう子どもたちがいるんだよ」と知つてもらつたところが**第一歩**だと思つています。そんなにカチツとしたこととはしない。

担当者の仕事を一緒にやっていく方法。僕が本場に現場にいたところに、実習担当が苦手というか、やっぱあまりそういうのは合わない職員がいる。僕み

いました。やっぱりここは大事なことだと思おうので、何とか学んでほしいポイントだとは思っています。

養①：当県でも、本当に施設の先生方は、ユニットには1人しか実習生がいないうにであつたりとか、また養成校とは変わらなない、それはこちら側でも配慮させていただきますが、そういうふうな形で、施①の先生に言うていただいたように、⁽¹⁰⁵⁾細かくご指導をさせていただいて、こまめにケアをしていただいています。

その中で、例えば実習生たちも学びが深まりますし、疑問に思っていることを職員の方に言えるし、そこに、言えなくても、例えば⁽¹⁰⁶⁾施設の職員の方が気付いてくださって、「大丈夫？」と言ってくださいから言えるという学

生もおりますし、本当にそういう形で⁽¹⁰⁶⁾配慮をしてくださっていることをあらためて感じられましたので、そういうふうにしていただけたら本当にありがたいというふうに思っております。

たいに、やたらしやべってしまう人とか、すぐ仲良くなれそうな職員を実習担当にするんです。大体、そういうのは、自分の所でも仕事がある程度できるので、それは副課長とか主任とかになっていく連中なんですから、こうなつてくると、彼らは、実習生が来て、何を教えたらいいいのかわからないのは、もうずっと代々受け継がれていることとかいうか、継続的な関わりを持てる。

みんな、不安で来るんです。これは、僕は児童施設の現場を20年やっていたんですけれども、うちに入ってくる子どもたち、先生のところもそうだと思うんですけれども、子どもたちというのは、早い子で言ったら、乳児院からうちに来てしまつたりするんです。で、それというのは、⁽¹⁰⁸⁾児童福祉施設とい

うのは、全て自分が手を挙げて、「入れてください」と言った人は一人もいないんですよ。気が付いたら、連れてこられて、例えば、小学校1年で親御さんが離婚などをされて、うちに来るじゃないですか。不安で不安でしょうがない。泣いていて。まず僕が面倒を見ます。僕が面倒を見て、ご飯を食べさせてあげて、トイレに連れて行ってあげて、お風呂へ一緒に入ってあげて、寝か

しつけて。でも、次の朝、早番は違う人が来るんです。かかる子はもつとかかる。に慣れるまで、2~3カ月、やっぱかかりやすい。「ひとまずは⁽¹⁰⁹⁾僕が担当だから、僕実習生にしても、そうだと思うんですよ。「ひとまずは⁽¹⁰⁹⁾僕が担当だから、僕と一緒に仕事を、ひとまず、僕の言うとおりにやらない」というのが一番大事。その継続性、連続性の中で、安心感も含めて。学びもやっぱり深ま

っていく。あとは、副担当は一応決めて、その職員がいないときは引き継ぐ。

養②：施設実習Iが入所型施設を経験すると。選択の保育実習のⅢについては、通所型の児童福祉施設を選択するという形式を取っていますので、そちらを選択する学生が年によってかなり人数的な幅があります。30名ぐらい、20名ぐらいのときもあれば、10名ぐらいのときもある

⁽¹⁰⁸⁾不安を抱えて出ていくんですけども、幼稚園と保育所と施設、3つ比べた場合に、帰ってきて、⁽¹⁰⁹⁾一番楽しかったと言う学生は、うちの場合には、施設が圧倒的に多かった。それで、それがなぜかという、幼稚園が一番怖かったということ。

施設の場合、いろいろ保育士が、それはさまざまな生活を通して子どもにも支援しているわけですけども、例えば、それも初めてやることも多いわけなんですけど、例えば、おむつ交換をしたりしたときに、⁽¹⁰⁷⁾施設の先生方というのは、きつと励ましたり、受け止めたりしてくれんですよ。あなた、初めての割にちゃんとできただじやない」みたいな、そういう一言がとて不安を解消して、「あ、自分ができるんだな」という、そういう意識を持つことにながっている。もう一つは、⁽¹¹⁰⁾指導案とか、そういう責任実習みたいなものがないというのが、若干、プレッシャーを低めるのに役立っているのかなということをちよつと感じています。

養①：まさに今、IとⅢのその区別をどうするかということも、先ほど申し

上げたワーキンググループのほうでやっているんですけれども、やはりⅢを選択してくる学生というのは、⁽¹¹⁴⁾就職といることを少し念頭に置いているので、児童養護施設の場合だけではないんですが、⁽¹¹⁵⁾個別支援計画とか、児童自立支援計画というところについて、少し触れる機会があるといい。⁽¹¹⁶⁾ファミリーソーシャルワーカーの話を聞く機会があったりとかというところで、⁽¹¹⁷⁾生活、施設の職務全般をといるところをベースに、その上に乗っかってくるところをどういうふうに体験させていただけなのかというふうには思っている。

本当に施設が楽しかったと言って帰ってくる。それは障害の施設であっても、そうでなくても、結局、⁽¹¹⁸⁾初めての体験の場所で、不安も大きいんですけども、行ってみて、初めてのことがかんがに刺激的だとか。で、やはり 3 を選択する学生は、そのまま就職につながっていきますので、特に何かということを要望するのであれば、就職ということを見据えたときに、もう少し深いところまで話を頂けるといいのかなというふうには思っています。ただ、実際、そこまでというところは、正直、短大では難しいかなというのもありつつ、その辺がちょっとジレンマかなと思っております。

養②：入所型施設実習、通所型施設実習は、施設の種類によって利用している子どもたちの背景も違ってくる。保育所実習なんかだと、子どもの発達過程みたいなものが、子ども理解のポイントになってくるかと思うんですけども、施設実習の場合には、⁽⁹⁰⁾子どもたちが自分の責任でも何でもなく、どういふ状況を生きてきて、その結果として、どういふことを経験して、今、施設で暮らしているのか、そしてその⁽⁹¹⁾施設で暮らすということの結果として、今、どういふことを、例えば、将来的な不安、家族の不安を抱えているのかみたいなところは、きっと、施設の種類の違ったとしても、ある程度共通していることじゃないかというふうなことは学生には伝えていて、そういつたことが施設実習に行くときの利用者の理解になっていくんじゃないかということは伝えていきます。

乳児院とか児童養護施設で実習をする学生、あるいは、障害者施設のほうでも共通していると思いますけれども、「⁽⁹²⁾どうしてここで暮らしているんだらう」というところに疑問とか関心を持つことはありません。ただ、それは、子どものプライバシーに関わることなので、「興味本位では、そんなことは、例えば、先生にお願いはできないよね」ということは伝えていきます。もし聞けるとしたら、子どもと関わっていて、子どもがこういう行動をして、あるいは、こういう行動をしてくと。それは、それで自分はその子どもとの関わりにとっても困ってしまっ、手掛かりが見つからないと。そういうことをきっかけにして、「では、⁽⁹³⁾何でこの子はこういうふうな行動をするんですか？」というふうにも少し質問したとしたり、その背景を、もしかしたら、伝えてくれるかもしれない。「そんな感じで質問してみると、どうですか？」なんていうことで、⁽⁹³⁾少し理解をしていくための取っ掛かりみたいなことで、後で伝えたりする

ことはあります。

ポイントとしては、どうしても施設について、新しい、知らないことが多いので、客観的に施設を理解しようとしてずっとやってくるんですね。ただ、もう一つ大切にしているのは、やっぱり(104)自己理解ということを大切にしていますので、さっきのエピソード記録の話にも関わってくるんですけども、「いろいろ理解したけれども、保育士を目指す⁽¹⁰⁴⁾あなた自身はどんなことを経験したり、どんなことを感じてきたのかとか、そういったことをもう少し、自分と向き合ってください」ということを言うようにしています。

障害のある方と出会って、⁽⁹⁴⁾どんな工夫をして、どんなことを感じたのか、障害のある方はなかなか言葉でコミュニケーションできないんだけれども、⁽⁹⁵⁾どういうところを見て、どんなことを伝えようとしているというふうに判断したのか、⁽⁹⁶⁾関わってみてどうだったのか、⁽⁹⁷⁾それを自分がどうだったのかということをやんと理解して、それをエピソードで書けばいいんじゃないかなんていうことをちょっと伝えるようにしています。

養①：一つは、記録のところ、保育所、幼稚園はやっぱり時系列でいうところが主流になっていますし、いろいろなパターンがあると思うんですけども、施設は、できれば、⁽¹⁰²⁾エピソード記録で記述をすることを、取り組んでいる。やはり⁽⁹⁸⁾考察をするときに、彼女たちの「何でだろう」という本当に単純な疑問というのは、実はすごく大事で、でも、素直なんですかね。勉強していないと思われたらどうしようと思って、聞かないんだと思うんですね。「本当にその『何でだろう』が大事だよ」ということを伝えて、⁽⁹⁹⁾自分はそのような場面でこういうふうに関わって、こういう反応があって、でも、本当にそれでよかったかどうかとも分からないから、⁽¹⁰⁰⁾どうすればいいかという、⁽¹⁰¹⁾自分がどうして、どう考えたかというのを合わせて伝える、それが質問することだと思ったり、⁽¹⁰³⁾言われたことを言われたままやるのではなくて、やっぱり考えてやるということをどうやって伝えるか。

もう一点は、生活ということをしつこく大切に伝えたいと思っているので、⁽⁹⁷⁾生活の場だということをしつこくちゃんと考えてくる。だから、保育所や幼稚園は毎日帰る家があるけれども、入所型の施設の子どもたちは⁽⁹⁷⁾そこが生活の場であって、その当たり前の生活をどう支援していくかということを見分けて考えてくる。⁽⁹⁸⁾当たり前の生活というのは一人一人違って、本当に見るもの全てが学生にとっては初めての場なので、「では、⁽⁹⁸⁾生活とは何だろう」、答えは出ないと思いますけれども、そこについて考えてくれることが、子ども理解につながったり、「⁽⁹⁹⁾支援とは何だろう」というところにつながるかなんていうふうには心掛けてやっています。

施②：社会福祉実習と保育実習を受けているんですけども、やっぱり保育士実習の方のほうで、時系列で最初、書かれていて、その中から⁽¹⁰¹⁾エピソードを取り上げて、考察というふうなところは、社会福祉士の学生よりも、まず最

子ども・利用者や施設理のための工夫		<p>初の部分がすごく濃いなど思っている。</p> <p>そのエピソードのときに、その⁽¹³²⁾考察という視点で、自分は本当にどうしてそう思ったのかという部分が、多分、大学でも指導して下さっているとは思わなかったけれども、最初、出来事だけが書かれている。その時系列とは違って、こういう行動をした。⁽¹³³⁾自分なりに行動を。その行動した理由とか、で、その後、子どもがどう反応したとか、そこが欲しいんですけども、そこが、初日からできる学生というのはやっぱりいなくて、指導しながら、徐々にできていくという。それでも、一緒にやらせてもらっているということで、感覚で僕らも思っていますので、一緒にやらせてもらっているというところで、そのノート自体の書き方とか、書式は、その辺りでは特に、本当にそれぞれの大学であるんですけども、やっぱりその考察というのは、僕らでも難しいと思うので、一緒にやりながら、やっていければなとは思っているんですけども。</p> <p>施①：時系列のやつは、どう使ってもらおうか、もういいと思う。⁽¹⁴⁸⁾職員が気付かされるのは、その考察とかエピソードみたいなところで、「ああ、そうか。そういうふう思ったんだ」というのは、僕らでは気が付かないところがあるんです。だから、「そうか。学生が見たら、その場面はそう映ったのか」というのは、逆に勉強になったりするんですけども。僕ら、結構年を取ってしまった心には。だから、何というんですけども。やはりそのときにそのことをどう思ったかという感想でもういいと僕は思ってしまうんです。その感想が、「ああ、こうやって思ったのか」、もし違っていたら、そこはこっちがそう思ったら、「実はこうこうだったんだよ」というのが言える。それがとても大事なのかという気はする。ポイント・ポイントで感想を書いてくれればいいかなと思います。</p> <p>やっぱり⁽¹⁴⁹⁾「こう思った」ということに対して、こっちがリアクションすると、それは変わってくるんです。だから、先生がさっきおっしゃったみたいに、アクションをしてくれると、リアクションはしやすい。特に、リアクションのほうは、こっちとしては、ちゃんと自分が思っていることを伝えやすいので。</p>
	<p>施②：今、学校で勉強をされている。もし、こういう児童福祉施設に就職してから、それはもう既に学び取ったもの、自分の中に入ったものと単純化して思いがちなんですけども、やっぱり本当を言うと、⁽¹⁷⁰⁾いざ現場に入ってから、あのたくさんの教材をもう1回、開くと、かなり入りやすくなるんです。ので、現在、勤めている人たちにも、それはよく言ったりするんですけども。</p> <p>要するに専門研修、専門的なことを勉強していくんですけども、同時に、こういう施設福祉に来ると、専門研修も、やっぱり組織性。発達障害とか他も含めて⁽¹⁷²⁾社会性、⁽¹⁷³⁾人間関係を築く力とか、⁽¹⁷⁴⁾社会規範を守る力とか、そういう障害児者のみのハンディーキーヤップというよりも、やっぱり、まだ</p>	

若い人たち。どんだんテクノロジーは便利になって、⁽¹⁷⁶⁾コミュニケーションのままだが学が必要があるし、死ぬまで、多分、コミュニケーションの勉強をしなければならぬということの上で、口頭で話すのと、記述にするのでは。やっぱり頭の中で、もう1回学ぶということが多くなるので、⁽¹⁶⁹⁾とにかく書く。これは書くエスプリとか。どんな人でも⁽¹⁶⁹⁾量をこなして初めて質に転じていくので、実習ノートというのは、拙くてもいいから、とにかく量を書かせていくのと。中に、やっぱり面白い視点の質問があったりした場合、そのノートの様式にとらわれず、レポート用紙の下にセロテープで貼ってでも、下に伸びてでもいいから、⁽¹⁸¹⁾職員が反応を返すようにする。そうすると、実習生にとつてはものすごく充実した期間になる。何人かに1人はそうやっていくんで、やっぱり頑張っ量を書くということも重要に思っています。

それと、実習に来た、このときのことだけじゃなしに。僕たちも中間反省会と、最後、全体反省会をしているんですけども、時にローテーション勤務で「ちよっと援助をこの部分だけ、してもらえませんか」と言っている場合とかには、やっぱり、あくまで今は学生で、実習をしているに過ぎないかもしれないけれども、⁽¹⁷⁶⁾働くということとか仕事観。この仕事は、⁽¹⁷⁷⁾やりがいがあるというふうに思っておられるんですけども、その中で、自分で見いだすものでもあるので、例えば⁽¹⁷⁸⁾今、勤めている人たちの中のエピソードであるとか、⁽¹⁷⁹⁾自分のキャリアも、おぼろげながら何かちよっと感じてほしい。⁽¹⁸⁰⁾20代の過ごし方、生き方みたいなものも、ちよっとイメージさせてあげようというふうには心掛けていますかね。

やっぱりその日の実習生と組んだ職員が、「ああ、この子は、もう最初から諦めているな」とかになると、もう厳しくしたところで、もうちよっと頑張れ。「このときはどう思ったんですか」とかいうので。やっぱりそれでも改まらなかったら、期間の真ん中の中間反省会で「⁽¹⁸²⁾もう、ここまではこうやったらけれども、残り、ちよっと頑張ってみよう」と。

施①：⁽¹⁸²⁾子どもたちの姿の理解というところでは、学生もそれぞれに授業等で、⁽¹⁷⁷⁾座学で学んできてくださっているかとは思いますが、**実際に実習に入れたときになかなかつながらにくい部分**というの、やっぱり思っているしやるのかなというふうに感じますので、そういうところを感じた場合には、こういう⁽¹⁷⁷⁾授業の話とつながるようなアドバイスができるようにというのは気を付けていますし。実際、反省会で「こういう姿があって」というふうに話してくださるときに、あえて「じゃあ、⁽¹⁶⁷⁾この場面で、**実習生はどういうふうに感じたのかな**」ということを聞かせてもらいたいが、子どもたちの理解につながるように⁽¹⁶⁸⁾支援方法を、また**新たな道を見つ**けられるようにというふうに思っています。

実習記録のほうでも、やはり⁽¹⁶³⁾一人一人の人の知ってもらおう人間理解というところをテーマに実習記録の記入をオリエンテーションのときから促すようにはしているんですけども、実際、学生によっては得意不得意がありますので。本当に第三者として子どもの様子を観察したまま記入していらっしゃる学生もいれば、そこにしっかり自分が主人公として、⁽¹⁶⁴⁾子どもたちとともに主人公として出てきて、エピソードを記入して、⁽¹⁶⁵⁾こういうふうに感じたという考察まで記入できる学生と、さまざまなかなというふうに思いますので、前者の第三者になりがちだという学生に関しては、より、こういうふうな書き方もあるということは、都度、お知らせするようにはしていますし。

養①：県は、手引きのほうは共通のものがあるとお伝えさせていただいたように、日誌も一応、共通のものがありまして、そちらを中心に。施設のほうにも、もちろん、こちらをお渡しさせていただいて、これで書かせていただくというお願いをさせていただいております。ただ、施設によっては独自のものを採用させていただいているところもあるので、そこはそれで書かせていただいています。

その中で、私が学生に伝える中のポイントは、まずは具体的にすることと、うことをしているという話をしていきます。やっぱり学生は、楽しいとか、うれしいとか、ちょっと抽象的なところがありますので、何がどうなのかというところをもう少し細かく見ていくことで。配慮というところを書く項目があります、それが配慮につながっていくと、具体的に書いていくことによって、⁽¹⁶⁶⁾自分が利用者に対して、その行動のときに何をしていたのかというところが見えてくる。そういうところを、しっかりと行動を見ているというところを言っています。ですので、自分で行動をしているのに、その行動を文字に落とせない学生というのはたくさんいますので、「ちゃんとやっている、話の中では出てくるので、それを記録に書いていくんですよ。細かいかもしれないけれども、具体的にたくさん、しっかりと書いていくことで、指導の方にも見えていただいて、ちゃんと意見とかご指導をいただけるから」ということを伝えていきます。そして、これの内容というか、1日の振り返り等のところでも、よく施設の職員の方に言われるのは、「日記ですね」というふうになります。結構、考察ができなくて、感想で終わってしまうので、⁽¹⁶⁷⁾具体的な事例を書いて、⁽¹⁶⁸⁾それに対してどういう行動を実際にかという⁽¹⁶⁹⁾自分の意見を書いて、⁽¹⁷⁰⁾そこに対してどういったのかを書くということを学生に伝えていきますし、じゃあ実際に書いてみよいかということ、⁽¹⁷¹⁾例えば DVD とかを見ながら、その一式とシチュエーションで書いてみて、⁽¹⁷²⁾私のほうで添削というのをさせていただきます。施②の先生に言っていたように、量を難しいのが現状ではあります。施②の中というところで、そういうふうにしてくださる施

	<p>設であればいいんですが、もちろん全ての施設がそういうところではありませんで、できるだけ授業の中では、通り一遍かもしれませんが、その辺りをお伝えして、学生には書けるようなベースをつくっているのが現状にはなっています。</p> <p>養②：ほば養①の先生が言ってくさったことと同じなんです。指導をするときに、一つ、やはり⁽¹⁵⁹⁾記録をすることが現場の方たちにどんな意味を持つのかというのを、具体的に、できれば伝えたいところがあるんですけれども。⁽¹⁶⁰⁾現場で求められる記録と、それから学生が実習期間中に行う日誌との関係性というか、整合性を少し持たせるような形で日誌のほうを工夫できないものだろうかということもいつも考えんんです。確かに非常に稚拙なものが多いんですけど、例えば現場で、こういう形で記録というのは使われるものなので、こういう観点で、こういうことがきちんとしていかなければいけないという。現場で求められる記録とか、書く力というようなどころを見せながら、⁽¹⁶¹⁾学生自身も記録に臨めるような何か教材とか、それから⁽¹⁶⁰⁾日誌の形態を工夫できないかということも、今、ずっと考えているところなんです。</p> <p>施②：現場のほうでの、普段の日常、デイリーの諸情報の日誌、あったことの特記事項を書き連ねていくことと、実習日誌というのは、比較的、共通する部分が多いと。</p> <p>ただし、⁽¹⁶⁰⁾自分が何を思って、エビデンスで、どう行動したかということも、やっぱり実習生の日誌には求められるからちよっと難しいんだろうなと、正直、思っています。</p> <p>これらの訓練を経て、現場では、まずは日誌のそういった普段のルーティンの仕事を身につけていて、その上で、今度により高次の専門性、個別支援計画、自立支援計画というの、やっぱりこれも量をこなして質にとというので、やっぱり職員を人材育成する上でも、難しく書けると言うわけでもなくて、特に⁽¹⁶³⁾先輩職員が若い職員に褒めてあげてほしいのが、「何年前の自分は、こまでのこれを書けなかったよな。書ける自分になったことを自分で、ちよっと誇れ。喜べ」というので言うようにはしていますけれども。</p>	
訪問指導	<p>養②：本学で言いますと、事実上、実習指導の授業を担当しているのが私1人で、学生は大体50名前後おりました。施設で言いますと、多いときには20弱の施設に分かれての実習となりまして、また授業期間中の実習といったこともありまして、どうしても巡回指導については私が向くことができないということ、全てに回ると言うことはできないので、⁽¹⁶⁷⁾学科教員全体で分担当をするというような形を取っています。</p> <p>具体的には⁽¹⁶⁸⁾こういうことを確認してきてほしいということで、⁽¹⁶⁸⁾巡回指導の手引きを作成しまして、それを学科教員で共有するようにはしているんですが、どうしても⁽²⁰¹⁾教員によって専門の違いも大きいことや、⁽²⁰²⁾理解度</p>	<p>養①：保育の養成校に移って、施設の巡回はもう福祉系の教員が行くというふうにそこはして、そうしないと、⁽²⁰²⁾話が通じなかつたりとか、⁽²⁰¹⁾専門性がかなり違いますが、同じ人間になるべく行くようにして、⁽¹⁹⁹⁾施設の方と顔が通じ合うというような関係をつくるように心掛けていました。今の学校に移っても、⁽¹⁹⁹⁾なるべく同じ地域に同じ先生が回る。それにプラスして、やはり出す前に、⁽¹⁹⁹⁾課題を抱えている学生が一定数おりますので、そこについては、実習指導1は5人で担当しているんですけれども、⁽¹⁹⁹⁾必ず担当が行つて、巡回訪問だけではなくて、⁽¹⁹⁹⁾場合によっては事前に連絡を入れたり、途中で連絡をしたり、もう一回連絡を入れたりとか、密な関係でというふう</p>

に差が生じてしまうこととありまして、指導というよりも、実習期間中の⁽¹⁸⁹⁾学生の状況把握にとどまっています。現状があります。元気にやっているかととか。

この 10 日間のうちに一度、訪問させていただき訪問指導をどういうふうなにしていったらよいかというのが、実は非常に困っているところなので、アドバイスをいただければと思うところ。

養①：本学も同様な感じにはなっております。本学は 50 くらいの施設に回ります。担当が 2 名です。同じように全てを回ることではできません。です。で、手引きまではいきませんが、⁽¹⁸⁹⁾「このポイントには実習先の職員の方に聞いてきてほしい。また、⁽¹⁹⁰⁾学生たちにはこういうふうな指導をしてほしい。⁽¹⁹¹⁾その中で疑問があれば、実習担当者に連絡をするように」というところにとどまっているのが現状にはなっております。実際のところを申し上げますと、⁽¹⁹²⁾施設の方から指導をいただいて、そちら側で踏まえさせていただきます。近々の指導には生かせないんですが、⁽¹⁹³⁾次年度等に生かしていることもありますし、本場に学生に元気でやっていると、⁽¹⁹⁴⁾様子伺いで終わってしまっているところもあります。もう少し、せつかく行かせていただいて、施設職員と直接、お話しできる機会です。で、⁽¹⁹⁵⁾有意義にできたらとは私自身も考えておりますので、アドバイスをいただけたらと思えます。

施①：各学校の状況というのはおありなのかというふうには思う中で、やはり学生の姿を見ていると、いつも顔を見知った先生方がいらして下さるというのは、一つ、⁽¹⁹⁶⁾あと残り数日を頑張ろうという気持ちになれるのかなというふうにも思うところではあるんですけども。

やはり⁽¹⁹⁷⁾直接、指導をなさっている先生がいらつしやること、より学生の実習がよいものになる時間から受け入れていくのかなと思えます。当園のほうでも、いろんな学校から受け入れてはいるんですけども、結構、ゼミという形で先生がいらつしやることも多いです。「ゼミの担当をしていまして」という形でいらつしやることも多いです。本当に実習指導を直接的にされている先生がいらつしやることで、来られない場合でも、学生自身はその先生のことを知っていて、話したことがあるんです。養①の先生や養②の先生がなさっているように、学生の、先生方ご自身が行けない場合には「こういうふうなことを聞いてきてほしい。こういう様子を見てきてほしい」というのは、やはり先生同士の連携を取っていらつしやるので、「ちよつと直接の担当者ではないんですけども、こういうふうな指導から聞いて訪問に来ては、この次第です」ということをお話しくださいですので、「その点に関しては、こういうふうなことです」というので、学生の様子をお知らせしたりとか。

あと、「こういうふうな、もう少し頑張ってもらえたらなと思っています」

は考えています。

本学は、180 人ぐらい学生がおられますので、実際は網羅することができず、後から後で課題が上がるようになってくることがあります。なるべく⁽¹⁹⁸⁾実習の中盤辺りに巡回ができるようにはしているんですけども、数が多くというところもあって、五月雨ではなく、一定の期間に全員が行く。1 教員が大体 12~13 カ所、約 5 日間で回ると、一定の期間に全員が行く。その後、大きくなつたときには特に問題なくやっていたんですけども、その後、大きくなつたときもあって、行かなくなつてしまつたりとか、そんなこともあって、若干、⁽¹⁹⁹⁾巡回が形式的になりがちで、きめ細やかな対応や指導は、やはり実習担当がしている。

⁽¹⁹⁷⁾巡回指導は、全教員がやる。あとは、こちらでもアプを取って伺ってはいらんんですけども、特に施設の場合は、イレギュラーなことが起きて、ご担当の方にお話しが聞えなかつたりとか、今日伺っている先生のところは、担当が固定でということでお話を伺いましたけれども、日によって、やっぱ担当が違つたりと、受け入れ担当の職員の方が、「私は実習生を見たいので」と言われてしまうことがあって、ちよつとそういうところは、あまり、こちらもお願いをしている手前、「何とかしてください」とも言えず、「ああ、そうですね」という感じが、ちよつとそこは、私たちがアプでも、やっぱ関係性ができなかつたというところを感じています。本場に、でも、やっぱ関係性ができなかつたという所については、受け入れてくださる施設側も、⁽¹⁹⁹⁾今まで言えなかつたことを言ってもらえるようになってきているので、巡回も、関係をつくるという意味では、すごく大切な方法だなというふうには感じています。

養②：施設の訪問担当は、小学校担当の 3 名を除く⁽¹⁹⁷⁾12~13 名で担当している、そこで学生とどんなふうな話をしてくるのか、実習先の先生方とどんなふうな意見交換をしてくるのか、⁽²⁰⁰⁾担当者に任されてしまつてしまつて、ちよつともしかしたら、ばらつきがあるかもしれません。⁽¹⁹⁸⁾最低限、確認していただくことは、後で記録用紙というのは様式が決まっていますので、問題ありだつたのか、なかつたのか、健康状態とか、いろいろそういう書き込み用紙がありますので、そういう部分で⁽¹⁹⁹⁾標準化を図っている。それで、なるべく⁽¹⁹⁹⁾中間ぐらいに行つてほしいです。それでそのときに、なるべく⁽¹⁹⁹⁾学生の話はしつかりと聞いて、⁽¹⁹⁸⁾いろいろ引き出すようにはしています。

施①：⁽²⁰⁰⁾できれば、先生、自分の生徒が行く施設はどういうところか事前に見に来ていただきたいというのが一つと。

⁽²⁰¹⁾毎年、来る学校が決まっているんです。ということは、先生がおっしゃったように、毎年毎年、少しずつあれはあるけれども、⁽²⁰²⁾大学は大学で引き継ぎをして、次の人に渡して行くんです。となつてくると、さっきみたいなことが起きづらい。⁽²⁰³⁾施設側も、もう分かっているんで、向かいやすいですし、

とか、逆に⁽²⁰⁷⁾すごく頑張っていらっしやることもお伝えしながら、訪問指導のほうは対応をしていますので。やっぱり学生にとつての、⁽²⁰⁸⁾指導をくださっている先生が訪問に来ていただけられるような体制というのは、学生にとつても**すごく必要**なのかなというふうには感じています。

施②：ちよつと、ここまでこうやって話していたら、うちの施設はオペレーションなどがめっちゃやさそうに思われてしまうから。決してそうでもなくて、過去に養成校の先生が来てくれたら、もう、やっぱり⁽²¹⁸⁾「ああ」と言っ**て泣いた子**もいましたし。もう、そうすると、よく、ちよつと調べると、うちの⁽²⁰⁹⁾職員も指導というよりも**姑みたい**になっていったんじゃないか**みたい**な、**そんな重箱の隅突きみたい**に言うのは修正しなければならぬこともあるし。

でも、やっぱり、まずは施設節というのを字義で、文字面で並んで、⁽¹⁸⁹⁾体感する中で、**本当に最初は不安、恐怖、分らないから**というのが、ちよつと**「ああ、そうでもない」**へ。知ることによって、**そういうのは平気**になっ**ていきます**し。

ただ、勉強する上での知識、そこからの。援助技術みたいなものも知識として学ぶんやけれども、やっぱり実習生に関わらず、社会で一番、求められているのは⁽²⁰⁹⁾主体性。世の中で成功をしている人は賢い人だと思いがちだけれども、⁽²⁰⁴⁾よい態度とやる気を持ち続けた人なんです。決して賢い人じゃないんで。

やっぱりそういうこととかで、⁽²⁰⁸⁾頭でつかちここうやって⁽²⁰⁹⁾自分で壁を築いたり、⁽²¹⁰⁾パフォーマンスが落ちがちな子は昔に比べて多い。⁽²¹¹⁾メンタル面で、こういうことをできると思っただけでも、学生の間で対人技術は、⁽²¹¹⁾感情等のしんどさで、もしかしたら⁽²¹²⁾修正をかけたほうが**いいよ**うな**学生**も、最近、ちよつとずつ見られるようにもなってきた**ほう**がいい**よ**うな**学**も**し**れ**な**い**け**れ**ど**も、先生が来られるタイミングという中で、やっぱり、⁽²¹²⁾ちよつと**難しい問題**があったときには、**そのときに協議**するようにはしていませんけれども。

きつと大学の先生たちも毎年毎年なのだというのと、同じ大学にすることというところは、学生は学生で、先輩、後輩になってくれるんですよ。で、そういうところでは、もう新しい所は、実は、断っているんですね。児童で言ったら、ただか30名規模で、2つの寮しかなく、毎月というわけにはいかないの、隔月ぐらいいにさせてもらおう。⁽²¹⁵⁾**絶対数がもう決ま**っているんですね。

先生たちが来る(訪問)ときに、実習の人たちは、もう何日か、うちでやっているから、うちの中のこととは先生以上に分かる。先生たちはやっぱり、学術的なところと、先ほど言った自分たちのカリキュラムの中のこととでしゃべる。そうすると、学生は「現場に来て、それを言われても」なんです。「確かにそれはそう。だけど、現場は現場でこうやって教わって、こうやって、今、やっている」ということを学生たちがしゃべります。本当だったら、僕らが大学の**そういうところに行**ってしゃべると同じように、⁽²²⁰⁾**実習担当の先生は、半日でもいいから、現場で職員と一緒にや**たらいい。

⁽²²¹⁾こつちの**感覚と先生たちの感覚が**ずれるところ**は**ずれる。生徒さんたちは、現場たちから、この教科書とか、いろいろな話を聞いて、うちに来て、「でも、現場はこうなんだよ」というところがあるんだ、3日、4日、5日たつてくると分かつてくる。子どもたちも分かつて。⁽²²³⁾学生たちは**「楽しいことは、こんなことがあって」というのを話**したい。だから、**そこを受け止めてくれる先生たち**がもうちよつと**いれば、楽しい**。

施②：実習担当が3人いまして、⁽²¹⁴⁾実習担当とその訪問担当の職員がいて、必ずその2名が学生と共に、先生を迎えて4名で巡回指導を受けるという形を取っています。

日程が合わないということはないと思っているんですけども、よく訪問指導で来られる先生が、学生の様子を聞かれたときに、「⁽²²²⁾私も何も知らない。今日、初めて会ってます」という先生が一番、僕らも困るんですよね。それは本当に一番困るかなということと。

児童養護施設の実習でたまにあるんですけども、自分自身が虐待を受けた経験をお持ちの学生がいて、フラッシュバックしてしまう方がいたりしたときに、「⁽²²⁴⁾ちよつと課題のある学生が、ちよつとこううので困っている」と言ったときに、本当に一番困る一言が、「やっぱりそうでしたか」と言われるのが、「知っていたのか」というところで、それはやっぱり子どもの施設です。それによって子どもたちが、もしかして、子どもに悪影響を与えることでもありますし、⁽²²⁴⁾そういう情報**というのは前もって教えて**いただきたい**な**というの、常々思っていますね。その辺りが、学生の状況が、僕らも最初のペーパーとレポートから、レポートだけ見ても、「ちよつとこの学生、大丈夫かな」という方がたまにいますけれども、何日かやっていく中で、結構、学生が生々しく自分の体験を語り始めたりとかして、僕らは、子どもの支援ではなくて、学生の話の話を聞かなくていいときも、それを⁽²²⁴⁾大学にいったときに、「ああ、やっぱりそうでしたか」と言われるのが、一番つらいかなとい

保護者支援の理解・経験	<p>施①：⁽²⁴²⁾ <u>実際の経験</u>というところでは、やはり積んでいただきたきにくいくところがあるが、あと、⁽²⁴³⁾ <u>実際に目にしていただきたき場面</u>というのなかなかないのが現状になっていきます。⁽²³⁸⁾ <u>毎月、支援計画というものを検討していますので、そういったものを読んでいただく中で、家族に対する支援の部分も計画立てをしていますんだ</u>と、そういったところで、<u>「ああ、実際、こういうことが行われているんだ」というのは、守秘義務の下、見ていただいているのみというふうな現状にはなるんですけども。</u></p> <p>やはり学生の中には質問をされる方もいらっしゃるしやいますので、具体的なことは控えておきますが、実際の部分で、ケース概要が分からない範囲で、「やっぱりさままま事情が、いろんな事情があるよね。虐待であったり、ちょっと一緒に過ごすことが経済的に難しかったりという、いろんなことが、学校の授業の中で話もあつたと思うけれども、ある中で、お預かりしているし、でも、やっぱり親御さんとの関わりはあるし」という、⁽²³⁷⁾ <u>私たちの実践を言葉でお知らせしたり</u>というところで補っている現状かなというふうに思います。</p> <p>施②：実習生のことではないですけども、うちは職員の親睦旅行みたいな中で2時間ほど何らかの研修をします。⁽²³⁹⁾ <u>見学</u>したり、⁽²⁴⁰⁾ <u>DVDを視聴</u>したりとかで。僕が若い世代にどうしてもこれに触れさせたかったというのが、先ごろもリメークされた某作家の『〇〇(作品名)』。要するに「離婚が増えた、再婚も増えた、その影響が子どもに」というのは、字義で学ぶだけでなく、あくまでフイクションかもしれないけれども、シーンの中で児童相談所が出てきて、こういう子が入ってくるというのを、やっぱり今の平成生まれの世代とかに触れさせたりはちよつと意識していて、「ああいうのは、ひよつとしたら学校でも使えるのではないか」などと思ったりします。⁽²⁴¹⁾ <u>何かディスプレイをさせる</u>、そういう勉強のときに。</p> <p>養②：私どものところでは、⁽²²⁶⁾ <u>背景についてお尋ねをする</u>ようにという。⁽²²⁶⁾ <u>質問をさせていた</u>で、⁽²²⁷⁾ <u>説明をしていただく</u>という形で。⁽²³⁵⁾ <u>体験する</u>ということは、やはり、<u>もうほとんどできな</u>い状況にありますので、⁽²²⁷⁾ <u>職員の方からレクチャー</u>をしていただく内容の中に必ず入れるようにはしています。このことは、ちよつと、やはり難しいものではないかというふうに思っています。</p> <p>養①：本学も同様になります。やはり⁽²³⁵⁾ <u>実習で体験する</u>というところは難しいと感じております。</p> <p>ただ、授業の中で、例えば虐待等に触れた場合には、やはり学生の考え方を</p>	うところですね。
	<p>施②：カリキュラムの中で、子どもたちが、例えば、面会に行くとき、面会、外出とかの場面に、できれば、学生を本当は立ち会わせたいんですけども、⁽²⁴²⁾ <u>計画としてはあるんですけども、難しい</u>。やっぱり職員との関係の中で、また保護者によつてはすごく難しい方もいらっしゃるんですけど、この保護者について、ちよつと具体的な体験ではなくて、どうしても⁽²³⁷⁾ <u>講義</u>というか、「こういうふうな形で、今、交流している」とか、「こういう保護者対応をしていくしかできなくて、⁽²³⁸⁾ <u>電話対応とかを横で聞いてもら</u>うとかは、そこはできるとは思いますが、ちよつとその辺だけです、これは、本当は難しい。これは取り組めなくて。</p> <p>施①：月に一遍ぐらい帰れる子が、お母さんか、お父さんが迎えに来るぐらいしか保護者は来ませんので、保護者支援について、実習生に対する経験とか支援の一環として、そこところというの、全くうちは教えてもいません。⁽²³⁷⁾ <u>「こういう形のニーズがあるんだよ」という話はする</u>んですけども、その一つ一つの家庭が抱えている部分に対しては、全く差はありません。</p> <p>小さな寮と、これから将来を展望しなきゃいけない。特に、特別養護、特別支援学校の1年、2年、3年になつてくると、児童施設なので。全国的に、加齢あつて、18以上で残っているという現状があるんですけども、うちは18歳以上作つていないんです。その3年間でご家庭と行政といるいるなことをやつて探していくんです。「この方だったら、大丈夫」とか、「この人は障害の程度が重くても、グループホームだったら、大丈夫」とか、「この人は障害の程度が重くても、やはり入所型の施設、うちの成人部みたいなところしか駄目だ」みたいなところはいいんですけども、保護者支援みたいなところに関しては、やっぱり難しいです。</p> <p>うちの場合は、成人部もあるし、入所型の施設としては、某自治体では一番、グループホームを持っていきますので。相談支援だけじゃありません。だから、そういうところの話はできません。</p> <p>養②：学生は、子どもたちが施設の後、どこに行くのかなんていうところ、やっぱり家庭を目指して、そのために行政機関なんかと連携しながら、いろいろやっているんだよ」ということはほかの授業なんかで伝えたりですとか、あとは、家庭支援専門相談員なんか配置されていますので、⁽²²⁸⁾ <u>「そういう組織の人には会いませ</u>た」とか、「<u>見掛けました</u>」なんていうことを訪問のときに伝えたりすることがあります。そうすると、何か、保護者らしき人、あるいは、もしかしたら、里親の人かもしれないみたいな感じで、⁽²²⁹⁾ <u>ちよつと意識する</u>ということがあるという、そのくらいですよね。</p> <p>養①：そうですね。母子の施設ですと、「少し事務仕事をしているふり」を</p>	